サラヤ株式会社御中

# ウガンダ国カセセ県における生計向上支援と母子の栄養改善事業

## 完了報告書

Save the Children

（保健医療施設で栄養指導を受ける順番を待つ母子、カセセ県ニャキユンブ準郡 2022 年 6 月）

2022 年 9 月

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

ウガンダ国カセセ県における生計向上支援と母子の栄養改善事業へのあたたかいご支援をいただき、誠にありがとうございました。皆様のご寄付が、地域の農家世帯の生計向上と母子の栄養摂取の改善につながりました。心からの感謝を申し上げますとともに活動の完了報告をいたします。今後も引き続きのご支援をお願い申し上げます。

## Ⅰ．背景と本事業の目的

### １．　事業対象地を取り巻く環境と課題

ウガンダでは、国民の 69%が農業に従事しており、農業が同国GDPの23%を占めています。　これを背景に、同国政府の「国家開発計画」では農業を経済開発の中心セクターの一つとして、その成長を推進してきました。特に農業産業化及び農業競争力の強化を挙げ、国民の食料安全保障向上を推進するとしています。一方で、人口一人当たりのGNIは、世界192か国中178位（780米ドル）に位置し、一人当たりの所得が極めて低いことが深刻な課題でもあります。

上記の所得水準が低いことにより、特に農村地域の母子の保健サービスへのアクセスや栄養不良の状況は依然として厳しい状態にあります。5 歳未満の子どもの発育阻害（身長が年齢相応の標準値に満たない慢性的な栄養不良）は29%であり、最低食事水準 を満たす乳幼児の割合は 14%に留まっています。また、鉄分不足により、6か月以上5歳未満の子どもの53%、15－49歳の女性の32%が貧血です 。乳幼児期の低栄養は、身体機能だけでなく、認知機能や学習能力の低下に繋がり、妊娠可能年齢女性の低栄養は妊娠した際の胎児の発育を妨げる大きな要因の一つとなっています 。

### ２．　本事業の目的

本事業では、ウガンダ西部地域の中でも栄養不良の割合が他と比較して高いカセセ県の母子を支援の対象とし、地域の保健医療施設での栄養啓発の活動を促進する他、農家の生産力や農業の知識向上に向けた支援活動に取り組んでいます。また、サラヤ社では、これまで10年間以上に渡り、ウガンダにおける「100万人の手洗いプロジェクト」を実施してこられました。とりわけ、新型コロナウイルス感染症の影響がある中、普段にも増して、手洗いの励行及び衛生環境の保持が強く推奨されています。これまでの取り組みがウガンダでさらに根付くよう、本事業では受益者や保健医療施設に対して、サラヤ社の衛生用品（手指消毒剤）を積極的に導入し、その使用を進めてきました。

## Ⅱ．活動報告と主な成果

### 活動（１）生計向上分野：農業普及員および農家世帯への研修、農家組合の能力強化

前年度の活動と同様、カセセ県農業局の農業普及員（50名）に対する研修（家畜の簡易研修も含む）から始めました。その後普及員は各自が担当する農家を回りながら研修内容を伝えていき、さらに農家が上手く活動できているか定期的に確認しに行くという方法を取ることによって、農家世帯と普及員の連携を強化しました。普及員はこれまでの経験を活かしながら、より効果的、効率的に農家を指導できるようになっています。本年の活動で選ばれた 200 世帯の農家は、農業普及員から研修内容を伝えられるまではこれまで同様、雨季になったら種を蒔いて、育ったら収穫する、雑草や害虫には注意を払ってきませんでした。普及員の指導を受け、実際、教わったとおりに、バナナ、キャッサバ、豆、メイズ（とうもろこし）等を植え、栽培を試みた農家からは「以前は自己流でメイズを栽培し、収穫できるのが 3 袋のみでしたが、今や 25 袋も採れるようになりました。おかげで、自宅の倉庫に十分保存しながら、市場でも販売することができ、現金収入が大幅に増えました。」、「今まで栄養を摂ることが重要だということも知りませんでした。家庭菜園を作るよう勧められて、ナス、トマト、（アフリカ）ほうれん草、玉ねぎを栽培していますが、収穫後に食卓に並ぶのが本当に嬉しいです。野菜を食べる前は子どもらの体調が優れませんでしたが、今は健康で以前のようにしょっちゅう町の保健医療施設に連れて行くことがなくなりました。」といった声があがっています。

農法指導を受けてメイズを大量に収穫できるようになった農家ら

（カルサンダラ準郡。2022 年 7 月）

農家を指導する農業普及員

（カルサンダラ準郡、2022 年 9 月）

また、200 世帯の農家を 20 世帯ずつ 10 のグループに分け、組合を作ることによって、作物の栽培で得た知見を意見交換したり、皆で資金を出し合い、組合として貯蓄を開始したりするなど家計を強化することにも取り組んでいます。組合で貯めている資金は、組合員である農家世帯が必要な時に借り入れ、農機具や種、あるいは養鶏用の鶏等を購入するのに活用しています。

本年度事業で特筆すべき点は、カセセ県に 2 ヶ所、魚（ティラピア）の養殖場を建設できたことです。2021 年第 2 四半期報告でお伝えしましたとおり、同年 10 月に土地の掘削（全て住民による手掘り）を開始した後、あぜを整え、注水口・排水口を設置しました。また、池の周りにフェンスを張ったり、鳥などが魚を捕食しないよう水面上部にネットを張ったり、安全面にも留意しました。そしてやっと、本年 6 月に稚魚を放流し、以降の成長を見守っています。9 月中旬段階で、10～13 cm に生育しており、12 月頃に漁獲できる見込みです。村人から多くの感謝の声が届いていますので、以下にご報告します。

## 農家世帯の声

- 「私は自分の村の村長を務めていますが、魚の養殖は長年の夢でした。自分たちの貯蓄だけではとても建設できる規模ではなく、今回いただいたご支援に心から感謝しています。土地の所有者から土地を借りる交渉から始めて、草木を伐採し、池を掘るまで全て自分たちの手で行いました。特に土地を借りる際は所有者に 40 万シリング（105 米ドル）を支払う必要がありましたので、自分たちが育ててきたトマトやナスなどの野菜を売って資金を作りました。稚魚は順調に育っていて 12 月頃に水揚げできる予定です。今から待ち遠しいです。」（ニャキユンブ準郡　農家男性）
- 「今回、養殖場の建設に参加して驚いたのは、その技術です。山中を流れる小川から水を引いてこられるようにパイプを据え付け、水の注入口と排水口を設置し池の水量・水質を自由に調節できる仕組みにとても感銘を受けました。また、魚が盗まれないようにフェンスを設置したり、鳥が捕食するのを防ぐためにネット張ったりするのも非常に大事だと思いました。建設中、いつもセーブ・ザ・チルドレンのスタッフが巡回指導してくれたので、分からないところがあると質問して解決することができ、建設がスムーズに進みました。」（マリバ準郡　農家男性）
- 「私は村落保健チームの一員としてセーブ・ザ・チルドレンの事業に参加しています。普段は赤ちゃんのいる家庭を回って、お母さんと子どもの栄養状態をモニタリングしています。2020 年に、この事業で栄養に関するベースライン調査を実施しましたが、マリバ準郡で栄養不良状態にある母子、特に 0～5 歳の子どもが多く見られました。我々の村々では、特にビタミンとタンパク質の摂取が足りていないことが分かりました。子どもに与える食事はキャッサバなど炭水化物類のみなのです。私はこの状況に大変心を痛め、各世帯への栄養指導を中心に、この 2 年間必死で活動に取り組んできました。大豆はタンパク質をはじめ、とても多くの栄養分を含んでいると聞いて、農家に大豆を栽培するよう勧めましたし、それを子どもたちにも食べさせるよう指導しました。今年は魚を養殖することができ、タンパク質をしっかり確保することができます。また、貧しい家庭には食べる以外に、魚を市場で売るよう勧めて彼らの現金収入を増やしていきたいです。」（マリバ準郡　農家女性）
- 「近隣の大きな湖で漁師が釣ってくる魚は、一匹だいたい 6,000 シリング（1.6 ドル）で売られています。しかし、地域住民にとっては高額で、普段は買うことができません。3 か月前、（サラヤ社にご支援いただいている）池に、2,000 匹の稚魚を放しました。今や手のひらを超える大きさになっており、順調に育っています。この池は 60 の農家世帯で共同管理していますが、水揚げできるようになったら、貧しい家庭でも買えるように廉価（一匹 4,000 シリング前後）で販売し、魚を食べるよう勧めていきたいと思っています。販売する側にとっても、例えばですが 300 匹ほど自分たちで消費して残りを売れば、1,700 x 4,000 で 6.8 百万シリング（1,800 ドル）になりますから、非常に高額な収入となります。この資金で農業や家畜飼育にもっと投資しても良いし、子どもの将来の学費として取っておいても良いでしょう。夢が広がります。このご支援は一生忘れません。本当にありがとうございました。」（ニャキユンブ準郡　農家男性）

養殖池の掘削中に休憩をとる農家ら

（マリバ準郡、2022 年 3 月）

注水口の工事を終え、注水を始めた池

（ニャキユンブ準郡、2022 年 3 月）

フェンスとネットの状況を確認する農家ら

（ニャキユンブ準郡、2022 年 5 月）

注水を終えた池　排水口側から

（マリバ準郡、2022 年 6 月）

稚魚へ餌をやる農家ら

（ニャキユンブ準郡、2022 年 8 月）

魚の成長度合いを確認する農家と当会職員

（ニャキユンブ準郡、2022 年 8 月）

**活動（２）母子の栄養改善分野：保健医療施設職員への研修、母親らへの栄養指導**

ウガンダ政府は、『ウガンダ栄養行動計画 II(2020-25)』を策定し、栄養摂取を推奨しています。首都圏では保健や健康に対する人々の意識は高まってきていますが、地方ではさらなる啓発活動を継続していく必要があります。本事業では、カセセ県対象 3 準郡の保健医療施設職員らおよび同地域の保健ボランティアチームに母子の栄養摂取の概念を理解してもらい、地元の村人に知識を伝えていくよう活動を進めてきました。生計向上支援と同じく、同職員とボランティアは 3 年目の研修を受け、彼らの栄養に対する理解と母子への指導は年々効果の高いものとなっています。例えば、三色食品群に関して、「赤（タンパク質）」は体を作るもの（肉、魚、卵、牛乳など）、「黄（炭水化物）」はエネルギーのもとになるもの（マトケ、ポショ、いも類など）、「緑（ビタミン、ミネラル）」は体の調子をととのえるもの（野菜など）、この 3 つの色をまんべんなく摂ることで、バランスの良い食事になることを指導しています。子どもの両親に伝える際は、口頭で説明してもなかなか理解しづらい点があり、これら食品の絵を自分たちで自発的に描いて説明したり、実際の食品を用意して紹介したりするようになっています。また、普段、ほぼ炭水化物類のみしか食べない世帯では、野菜や肉を見てもどのように調理するのか分からないという声も聞かれ、調理実演・実習も活動に取り込み始めました。

サラヤ社寄贈のテント内で栄養健診を受ける幼児

（ニャキユンブ準郡、2022 年 3 月）

重度の急性栄養失調で病院に紹介された乳児。

母親は母乳が出ない状態。

（ニャキユンブ準郡、2022 年 4 月）

## 母親・保健職員たちの声

- 「この度はテントを寄贈いただき、深く感謝いたします。以前は施設内の一室を使用していましたが、非常にせまく、特に新型コロナウイルス感染症が発生してからは、換気の必要性から木の下で栄養カウンセリングを行っていました。雨が降った時はもちろん、強い日差しがある場合もカウンセリングし辛い状況でした。特に、個人の体調問題や家庭内の問題など一対一での対応が必要なお母さんらにとっては望ましい環境では全くありませんでした。当施設には毎週平均 150 名のお母さんが訪れますが、グループもしくは個別に話をする際、このテントが非常に役立っています。『ここは個別カウンセリング専用、あちら側は健診とグループ用。』といった感じで私自身、スペースをどう有効に使うか頭を使いながら楽しく仕事ができるようになりました。改めて御礼申し上げます。」（ニャキユンブ準郡　女性保健施設職員）
- 「ここの保健施設（テント寄贈先）はいつも混んでいて、予防接種等で子どもを連れてくる時、子どもと自分に病気がうつらないかいつも心配していました。栄養カウンセリングを受けたくても、気が進まない状況だったと思います。でも今は野外の広いスペースで屋根（テント）があり、日差しが強い時も楽にいられますし、開放感があって気持ちよくカウンセリングを受けられています。現在、妊娠中ですが、子どもが生まれたら生後 6 か月以降の離乳食も含めて、どのように食べさせていく必要があるのか、多くのことを学んでいます。テントが設置されてから、より多くのお母さん方が栄養・保健カウンセリングを受けに来られているような気がします。彼女たちも私と同じ思いだったのではないでしょうか。」（ニャキユンブ準郡　女性）
- 「今から 20 年近く前、セーブ・ザ・チルドレンのプロジェクトで建てられた棟があるのですが、老朽化が進むのと同時に維持管理費の不足から、雨漏りがひどい状態でした。いつも湿気ているため、内部の壁や床も損傷し、機材を保管できる状態ではありませんでした。しかし今回、サラヤ社のご支援を受けて隅々まで改装することができ、新品同様の棟になりました。（以下の写真のとおり）乳幼児の体重・身長計やお母さんたちが座って栄養カウンセリングを受けられる椅子、カウンセリングに使用する教材も全て室内に保管することができるようになりました。どうもありがとうございました。」（マリバ準郡　男性保健職員）
- 「今、二人目の子が 2 か月なのですが、自分の母乳の出が悪く、一人目の子の時は 4 か月くらいからお粥を与えていました。しかし、ここの保健施設で栄養カウンセリングを受けた時に、6 か月までは母乳のみで良い、また自分が栄養を摂らないとしっかり母乳が出ないことを学びました。今まで色々な食材を食べることがなかったので、野菜や肉を用意してもどのようにして料理すれば良いのか分かりませんでしたが、施設で食材・調理実演をしてくれたので自宅で挑戦しようと思います。」（マリバ準郡　女性）

| | |
|---|---|
| | |
| 自宅庭で育てたナスを持つ女性（右）左 3 人は本事業の保健ボランティア（マリバ準郡、2021 年 10 月） | 保健施設の栄養カウンセリングを受けに来た母親の子。同施設の庭で栽培している人参。（ニャキユンブ準郡、2022 年 4 月） |
| | |
| 上腕周囲径テープの使い方を学び、栄養保護者会で実演している男性（カルサンダラ準郡、2022 年 4 月） | 食材を並べ、食品群と栄養素の説明を行う保健職員。（マリバ準郡、2022 年 5 月） |
| | |
| 保健職員の説明を熱心に聞く母親ら（マリバ準郡、2022 年 5 月） | サラヤ社の支援で改装された栄養カウンセリング用施設棟（マリバ準郡、2022 年 6 月） |